

ジェノバ・サミットの外相会談を 報道する新聞を見て考えたこと

— 現代の学校教育に対する二つの提言 —

足利市立第二中学校 大 野 和 章

1 問題提起

ジェノバ・サミットの外相会談を報道する新聞の第1面の写真を見て、私は深い感慨に襲われた。それは、我が国の田中真紀子外相が、サミットに参加した欧米各国の外相に促され、記念撮影をするために、各国外相の中央に進もうとする様子を捉えた写真であった。今から百年余り前の時代には、まったく想像することができない場面であった。

今から百年以上も前の時代である江戸時代末期（18世紀）になると、欧米列強は市場を求め、遠くアジアの国々にもその魔手を伸ばし始めた。その頃の我が国は、太平の眠りのまっただ中であり、外国と自由な交易を持たないいわゆる「鎖国」の状態にあった。そして、近代化の遅れた他のアジア諸国同様に、欧米列強の植民地に陥る危険性が極めて大きかった。1854年、再来日した米国の遣日特使であった東インド艦隊長官ペリーが率いる4隻の黒船の勢いに負けて、200年以上の長きにわたって国是であった鎖国を解いた。ついで関税自主権がなく領事裁判権の認められた不平等条約を欧米列強の国々と締結するに到る。これ以降、日本はこれら不平等条約を改正すべく、また、欧米諸国に追いつき追い越すべく、産業、軍事、教育、文化など、ありとあらゆる面で努力と苦勞を重ねることになる。

そして、ついに、その七難八苦の末、現在は国民総生産では米国に次いで世界第2位であり、先進工業国の地位を占めるに至った。国土も小さく、山地が多く、しかも、資源にも恵まれない我が国がこの1世紀余りの間に大きく発展した事実は、「東洋の奇跡」とよばれ、各国から驚異の目で見られた。はじめに、この東洋の奇跡をもたらした要因は何であるか考察したい。

2 「東洋の奇跡」をもたらしたもの

「東洋の奇跡」をもたらした要因として、日本民族の勤勉性、江戸時代すでに日本国内で経済や流通が十分発達していたこと等、様々な理由が考えられるが、その最大の要因は「教育の力」とりわけ、「学校教育」のもたらした効果が極めて大きかったため、と考えられる。

当時の後進国日本が、欧米列強による植民地化から逃れるために、また、欧米列強と結んだ不平等条約を一日も早く改正するために、我が国を急速に近代化し、文明開化させ、少しでも欧米列強の文明に近づく必要があった。そして、その切り札と考えられたのが教育であった。

幕府崩壊後、明治政府は立て続けに、我が国の教育の基本となる施策を打ち出した。

- (1) 明治4年の文部省の設置
 - (2) 同5年の被仰出書による学制の公布
 - (3) 同12年の教育令公布
- 等である。

これらの政策により「学校教育」の条件が整い、どこの村にも、どこの家でも学校に入学しない者はいないようにするという、いわゆる「国民皆学の精神」を実現しようとした。そして、日本の近代化がその後急速な勢いで進展していった。

この結果、影山昇（1991）によれば明治40年には我が国の就学率が97%に達し、高等教育機関の在学者数も20世紀初めにはイギリスやドイツやフランス等の欧米列強と肩を並べる水準にまで達した。こうした高い教育水準が、その後の驚異的な近代化や工業化を現実なものとしていったと考えられる。

では、どうして、我国がこれほど短期間のうちに、高い就学率や高い教育水準に到達することができたのであろうか。

それは、幕末から明治にかけての時代背景に、その秘密があると考えられる。影山（1991）によれば、その時代我が国では教育の中心となる幕府の昌平坂学問所を筆頭に、和漢医学や西洋医学、洋学のための諸学校、さらに、全国には270校にも及ぶ藩校や数百を数える郷校、庶民の子弟教育の中心的役割を果たした寺子屋や、漢学・国学・医学といった専門分野の学者が開いた私塾等々、多様な教育機関が存在しており、当時の日本人の読み書き能力は極めて高いものがあったという。また、新井郁男前上越教育大学教授の説によると、江戸時代末期に我が国に存在した寺子屋の数は、一万数千にもものぼり、これは明治初期に設置された小学校の数と、ほぼ同じ数であったという。

寺子屋とは、江戸時代にあった庶民を教育するための学校である。この寺子屋では日常生活を営む上で基礎になることから、いわゆる、「読み、書き、そろばん」が、教えられていた。小学館の日本大百科全書によると、寺子屋は一教室・一教師の素朴な規模（学童20～30人位）で、ここで学ぶ学童は6、7歳から12、3の男女であった。また、幕末期の寺子屋の就学率は、40～50%であったという。この寺子屋をはじめとする多様な「学校」で行われた教育の伝統が、次の時代の学校教育の普及に生かされたと考えられる。さらに、この明治以来の学校教育が、我が国の近代化や工業化を急速に押し進める推進力となり、この結果として「東洋の奇跡」がもたらされたと考えられる。

3 現代の学校教育が抱える問題点

しかし、明治5年に学制が公布されて百年以上経過した現在、学校教育における様々な問題点も指摘されている。

平成12年度の文部省の基本調査を見ると、心理的原因などで登校できない「不登校」で年間30日以上欠席した中学生の数が、はじめて13万人を突破した。しかも、年々その数は増加している。また、相変わらず多いのは、いじめの問題である。学校現場では、種々の方策を講じているのにもかかわらず、なかなか根絶できないのが現状ある。

さらに、加熱する受験戦争も依然として存在している。塾や予備校など、受験産業も相変わらず繁盛している状態が続いている。

また、子どもたちが授業が始まっても席に着くことができない。授業中にもかかわらず、次か

ら次ぎにトイレに行ってしまう。先生の指示に従わず出歩いたり、勝手におしゃべりをしてしま
う等、授業が全く成立しない学級崩壊という言葉もマスコミを賑わした。

さらに近年は、理科離れの問題もしばしば新聞紙上等で取り上げられている。国際数学・理科
教育調査の結果（1999年に、38の国・地域で、日本の中学2年生に相当する生徒を約5千人ずつ、
総計で約18万人を調査した。）によると、理科を「大好き」「好き」と答えた生徒の割合は、日本
では55%となっていて、国際平均の値である79%を大きく下回る結果となった。しかも、前回の
調査（1995年）よりもその割合が低くなっており、これは、理科離れを支持する調査結果となっ
ている。また、この調査からは、理科ばかりでなく数学にも同様な傾向があることが、明らかに
されている。

国土が狭い上に人口密度が高く、山地が多く、資源にも恵まれない我が国が、科学技術を発展
させ、工業化を推進することで、今日の繁栄をもたらしたことを考えると、この理科離れの問題
は、かなり深刻な問題であると考えられる。

さらに、庭野義英上越教育大学助教授は、「現在の子どもたちは理科・数学に限らず、どの教科
に対しても学習することへの意欲が低下する傾向にある。」「物事に対する興味・関心を失なう傾
向にある。」と述べている。さらに、庭野は、現代の子どもたちが生きる意欲を失いがちな傾向や、
学習に対するやる気の少ない傾向は、日本に限らず、米国、ドイツ、イギリスなどの先進工業国
に共通した問題であると述べている。先進工業国は、産業が発達し、経済的にも裕福な国々であ
る。物に恵まれ、生活が豊かになるにつれて、これに反比例するかのようになり、人間のたくましく
生ようとする力が、低下する傾向にあるということは、よく耳にする話である。

物質的に恵まれ過ぎる弊害で思い出されるのが、かつてのローマ帝国である。イタリア半島の
中西部に小さな都市国家を作っていたローマ人は、紀元2世紀初めには、今のヨーロッパのほとん
どと、中近東、北アフリカを領土とする大帝国を形成するに至った。ローマ帝国の属州から富が
集まり、ローマ帝国の都市には、いくつもの柱廊、競技場、神殿、凱旋門が建てられた。ローマ
人たちは広大な屋敷に住み、遠く中国からもたらされた絹の衣装を身にまとい、食卓を全世界か
ら集めた珍味の数々で賑わしていたという。弓削達（1989）によれば放恣に疲れきったローマ人
たちは、さらに、食の快楽をむさぼろうとして「食べるために吐き、吐くために食べる」ことを
繰り返していた。豊かになったローマ市民は快楽のみを追求し、ローマ市民としての義務、たと
えば、兵役の義務をも果たそうとはしなくなった。

この結果、富と安住の地を求め、ローマ帝国の都市に流入した新興勢力であるゲルマン人の台
頭をもたらした。そして、ついに、ローマ市民が放棄した軍事力を握ったゲルマン人の傭兵隊長
オドアケルによって永遠を謳われたローマ帝国（正確には西ローマ帝国。AD476年）が滅ぶこと
になる。

物質的に恵まれ過ぎる弊害によって国を滅ぼしたローマ帝国の轍を、再び繰り返さないため
にも、我々は現代の社会が抱える問題点を直視し、その問題を解決する手だてを探って行かねばな
らないと考える。

4 学校教育に対する二つの提言

前述したように、学校教育自身解決しなければならない問題を抱えているが、現代社会の持つ様々な問題、(例えば、心の問題、人権に関する問題、地球環境の問題、高齢化社会の問題、情報化の問題など)を解決するための鍵となるのが、やはり、学校教育であると筆者は考える。

碓井岑夫(1987)は、現代のように発達した社会において学校教育ほど組織的に、意図的・継続的に教育機能をはたす機関はほかにない、と述べている。

また、子どもたちが家庭以外の場所で一番多くの時間を学校で生活していること。顕在カリキュラムや潜在カリキュラムによって教育が計画的・統合的に行われていること。クラスや学年、部活や生徒会活動など、集団での教育活動が行われ多様な人間関係を築くことが可能であること。保護者や地域の人々との強いつながりによって教育がなされていること等、トータル面で学校教育に代わる教育システムは今のところ存在しないと筆者は考えるからである。

これらの問題に対処するために学校教育において具体的にどのような方策があるかは、筆者の能力も勉強も不足しており、詳細は別の機会に譲りたい。しかし、これからの学校教育を考える上で重要と思われる次の二点をあげ、それについての私見を述べたい。

まず1点目は、東洋の伝統思想を見直し、これから学ぶことである。我が国はわずか百年余りの間にヨーロッパの近代文明を学び、ヨーロッパのいずれの国にも負けなくらい科学的な文明を持つ国になった。と同時に、その弊害も露呈しつつあると考えられる。

哲学者の梅原猛によると、現代社会を説明するキーワードは「崩壊」と「破壊」であるという。なるほど、現在は地球規模で環境の破壊が進行している。政治的には米ソの二大超大国の対立という図式も崩壊した。また、地域社会の連帯も崩壊しつつあると言われているし、核家族化の進展や離婚率の増加など、家族の崩壊も進行しつつあると考えられる。さらに何にも増して恐ろしいは、倫理と精神の「崩壊」や「破壊」である。政治家が汚職や賄賂で逮捕されるは有に及ばず、外務省の高官が多額の公金を不正に流用して懲戒免職になったり、法の番人たる判事が少女相手に援助交際をして摘発されるという事件も起こっている。また、元国税局長が脱税容疑で逮捕されるなど、まさに、倫理の崩壊を象徴するような事件が続発している。

さらに、神戸の中学生が知り合いの小学生を殺害し、その首を自分の通っている学校の正門に置いた事件。無職の男が大阪府の池田小学校に不法に侵入し、持っていたナイフで若い小学生を次々に殺傷した事件など、正常な精神が全く崩壊しているとしか考えられないような残忍な事件も、続発している。

我々は現代社会における便利さや経済性のみを追求し、これを発展させてきた。そして、現代社会の持つマイナス面に目をつむってしまった。この結果、地球環境は言うに及ばず、人の倫理や精神を「破壊」や「崩壊」させることにつながっているのではないだろうか。現代社会の持つマイナス面を矯正する方策はあるのだろうか。

幸い我が国は、伝統的な東洋の智慧というべきものを持っている。例えば、本市には日本最古の足利学校がある。この足利学校は室町末期には学徒三千人といわれ隆盛を極めた。また、足利学校は当時布教のため日本を訪れていたイエズス会のフランシスコ・ザビエルが本国に宛てた書

簡の中で、「板東の大学」と紹介したほど、有名な存在であった。

ここで講ぜられたのが易学、儒学等の東洋思想であった。国史大事典の足利学校の記述によれば、足利学校第11代座主「睦子」はとくに「論語」を重んじた。論語の内容は、孔子が折に触れて語った言葉、弟子同士の問答などを収録した書物であり、「子の曰わく、これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず。(岩波文庫『論語』p.117-118より抜粋)」「子貢問うて曰わく、一言にして以て終身これを行なうべき者ありや。子の曰わく、其れ恕か。己れの欲せざる所、他に施すこと勿かれ。(『同文庫』p.315より抜粋)」等、味わい深く、かつ、人生や教育の指針となる名言が多い。足利学校の伝統でもあるこの東洋の智慧を、学校教育においても大いに活用し、現代社会のひずみによってもたらされた心の「崩壊」や「破壊」をくい止めるため、あるいは、心を癒すための教育を推進すべきであると考えられる。

第2点目は、学校教育において、教師の生徒に対する「感化」を最大限活用することである。岩波書店の広辞苑によれば、感化とは「人に影響を与えて心を変えさせること。」とある。教師の影響力の低下が懸念されている昨今であるが、どんなにティーチングマシン等の機械が発達しても、この「人の生き方が人に影響を及ぼし、人の心までも変えてしまうこと。すなわち、感化」だけは、それら機械がなしえない、人と人との間に生じ得る特有な力動的な作用であると考えられる。

ところで、感化で思い出されるのは、幕末の長州藩での松下村塾における吉田松陰とその門下生との関係である。その松下村塾は、元来は庶民・下級士族のための教育機関であった。松陰が松下村塾の指導者になると、松陰を慕って、松下村塾に入門する者が相ついだ。その松陰の指導した松下村塾から、桂小五郎、高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤俊輔(博文)、山県小助(有朋)など、我が国が内憂外患に苦しんでいた幕末・維新时期に縦横無尽に活躍する人々が輩出された。これら憂国の志士たちの師であった松陰自身、深く国を憂い、我が国の難局を打開しようと考え、折しも下田に停泊中の外国船で密航を企てたほどである。運悪くこの企ては、幕府との関係悪化を恐れた異国船の船長の判断により阻止され、失敗に終わる。しかし、このエピソードからも分かるように、彼らの師匠であった吉田松陰は、まさに情熱のかたまりであった。そして、この情熱が、この年若い弟子たちを感化し、この若い弟子たちが長州藩を倒幕派に変え、ついには日本をも動かす維新回天の原動力となったのである。

学校教育を十分に機能させるうえで、教師の児童・生徒たちに対する感化の重要性も十分に考慮されなければならない。そのためには、教師自ら「学ぶことの意味」、さらには「人間としていかに生きるべきか」「人間とは何か」など、己の「教育観」「人生観」を深めながら、日々の教育実践にあたらねばならないと考える。

これからの社会は変化が急激であり、益々混迷の度合いを深めていくと考えられるが、学校教育に対する期待、教師に対する期待は、今後とも増大していくものと考えられる。これら期待に応えるためにも、「東洋思想の知恵」や「教師による感化」を、いかにしたら現場で具現できるか、今後の課題として行きたい。

【引用・参考文献】

- (1) 朝日新聞、朝刊 2001 7月18日付第1面 「ジェノバサミット直前G8外相会議」
- (2) 影山 昇 1991 教育に求められるもの 影山 昇編 20世紀フォットドキュメント第4巻
「教育」ぎょうせい
- (3) 小学館 1984 日本大百科全書
- (4) 朝日新聞、朝刊 2000 8月5日付第2面 「不登校、13万人超す」
- (5) 朝日新聞、朝刊 2001 1月18日付第30面 「理科離れを探る2」国際比較
- (6) 弓削 達 1989 ローマはなぜ滅んだか 講談社現代新書
- (7) 司馬遼太郎 1989 世に棲む日々 文春文庫
- (8) 吉川弘文館 1979 国史大辞典
- (9) 梅原 猛 1968 文化の中の生と死 岩波講座哲学第13巻「文化」岩波書店
- (10) 碓井 岑夫 1987 学校の機能と役割 柴田義松・竹内常一・為本六花治編 教育学を学ぶ
— 発達と教育の人間科学 — 有斐閣選書
- (11) 梅原 猛 1991 森の思想が人類を救う 小学館
- (12) 新村 出 編 1991 広辞苑第4版 岩波書店
- (13) 金谷 治 訳注 1999 論語 岩波文庫